1．主な収蔵資料

1. 図書資料

(1) 美術関係図書

日本・東洋・欧米の美術に関するものを中心に、各地方公共団体刊行の文化財関係調査報告書、展覧会の図録・目録類、売立目録など和文欧文あわせて174,945冊の図書に加え、和文5,491種、韓文54種、中文153種、欧文507種におよぶ美術関係雑誌170,527冊を所蔵している。その他江戸期の写本版本をはじめ、明治大正期刊行の大型美術図録や美術雑誌、また明治から昭和初期に開催された各種博覧会展覧会資料など、多くの貴重書を所蔵している。

(2) 無形文化遺産関係図書

古典芸能・民俗芸能・寺事・伝統的な技術、その他我が国の無形文化遺産の研究に必要な図書19,139冊を所蔵している。そのなかには、雅楽画報・演劇画報・歌舞伎新報・歌舞伎（第１次）・テアトロ（第１次）・新劇・上方・民俗芸能・日本民俗・芸能復興・郷土研究・旅と伝説など現在では入手しにくい雑誌、国立劇場ほかで行われる芸能公演の上演資料や声明本・謡本・囃子手付本・丸本などの台本・譜本など、多くの貴重書を含んでいる。令和２年度は344冊を登録し、現在進行中である。

(3) 保存科学・修復技術関係図書

伝統的生産及び工芸技術書、技術史またはそれらの科学的究明を試みたもの、修理工事報告書及び化学･物理学･生物学部門の保存科学の関連和洋書、あわせて11,578冊を所蔵している。

(4) 日本国外の文化遺産関係図書

国際資料室では、海外の文化遺産や文化財保存、文化財国際協力や文化財保護制度に関する国内外の図書資料を約15,000点所蔵する。また、文化財保護関連機関のパンフレットなど図書以外の文献資料の収集、さらに国内外の文化財保護関連法令資料の収集を実施している。

令和３年度における収集数（韓文・中文図書は、和漢書として計上）

区　分	美 術 関 係	無形文化遺産関係	保存修復関係	日本国外の文化遺産関係	計
和漢書	1,796冊	339冊	747冊	128冊	3,010冊
洋　書	138冊	5冊	21冊	20冊	184冊
合　計	1,934冊	344冊	768冊	148冊	3,194冊

2. その他の資料

(1) 美術関係資料：文化財情報資料部が管理している写真資料は、絵画・彫刻・工芸・建築等の台紙貼写真、売立目録カードなど総数約26万点である。写真原板は、モノクロ4×5フィルム約49,740点、カラー4×5フィルム約8,980点、半切ほかガラス乾板約21,000点をはじめとして、各種サイズのモノクロフィルム約3,450点、X線フィルム･赤外線フィルム約3,300点などを所蔵している。また、当研究所旧職員梅津次郎、秋山光和、田中一松、久野健、中村傳三郎、松島健各氏寄贈研究資料の公開に向けた整理のほか、鈴木敬氏旧蔵写真資料の整理を行っている。このほか、拓本類、作家伝記資料、落款印章資料、近現代作家・団体・画廊・作品資料、資料スクラップ等と図版カード、各種索引類などを管理している。

(2) 無形文化遺産関係資料：無形文化遺産部では、雅楽・能・歌舞伎・邦楽・寺院行事・民俗芸能その他の伝統芸能の技法を、録音・録画、写真撮影等の形で記録することを重要な業務としてきた。これまでに、現地での実況や所内の実演記録室等での演奏を記録したオープンリールテープ約2,300点、ビデオ1,191点、スチル写真は関連する文書の記録写真等も含め約19万点、CDはオープンリールテープをデジタル化した物を中心に1,986点、DVD3,839点、BD752点を作成してきた。令和3年度は、DVD2点、BD153点を登録した。また、市販された伝統芸能関係の資料の収集も進めている。ことに、1960（昭和35）年度文部省機関研究費によって購入した安原コレクションは、明治・大正・昭和３代にわたって発売された各種邦楽のSPレコードを網羅した約6,000枚の一大コレクションで、近代における邦楽の実態と変遷を知る上で貴重な資料である。レコードの収集枚数は現在約7,300枚に及んでいる。その他これまでに、市販のビデオ530点、CD1,915点、DVD1,629点、BD12点を収集してきた。うち令和３年度は、市販のCD ６点、DVD108点、BD ３点を登録した。なおSPレコードコレクションの詳細は『音盤目録Ⅰ～Ⅴ』（東京国立文化財研究所刊 1966～1996）で公表している。また令和２年度に当研究所に寄附された、日本の伝統楽器や関連資料の蒐集家・及川尊雄氏旧蔵紙媒体資料（2,209点）について、『及川尊雄旧蔵紙媒体資料目録』（2021年3月）を刊行するとともに、「及川尊雄旧蔵 紙媒体資料データベース」（2022年3月公開）にて目録を公開している。

(3)　保存科学・修復技術関係資料：保存科学研究センターでは、考古遺物や美術工芸品など、諸部門の文化財を撮影したX線フィルムを多数所蔵する。X線透過撮影は昭和20年代から力を注いで行っており、近年それらのデータをデジタル化し、整理する作業を進めている。

(4)　国際関係資料：文化遺産国際協力センターでは、日本の文化財保護に関する国際協力の分野で活躍した専門家の資料を受け入れている。関野克氏旧蔵資料には、国際機関での会議や、個別の文化遺産保存に関わる記録が含まれている。特に、UNESCOの条約や勧告に関わる資料には、草案や日本政府の意見書なども含まれ、その成立の経緯や日本政府の関与なども知ることができる。伊藤延男氏旧蔵資料は、戦後の文化財保護行政に関する諸資料のほか、関野克氏の後継者として関わった国際機関の会議等の資料が多く含まれており、関野克氏旧蔵資料と併せて戦後の文化財保護行政における国際関係の動向を知りうる幅広い資料群となっている。また、千原大五郎氏旧蔵資料には、ボロブドゥール修復事業関連の会議録、書簡類、修復案、図面、オランダ統治時代の研究書や、その他の東南アジア諸国の遺跡に関する文献や図面、写真も数多く含まれる。さらに、野口英雄氏が収集した、文化財の危機管理やユネスコ日本信託基金による保存修復事業などに関する資料を受け入れている。

2．研究所関係資料

1．設立の経緯

東京文化財研究所は、2001（平成13）年4月1日に東京国立文化財研究所が独立行政法人化され独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所となり、さらに2007（平成19）年4月1日に独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所となり、現在に至っている。その前身である東京国立文化財研究所は、1952（昭和27）年4月1日に発足し、その母体となったものは、1930（昭和5）年に創設された政府機関の帝国美術院附属美術研究所である。

この美術研究所は、1924（大正13）年7月、帝国美術院長子爵故黒田清輝の遺言により美術奨励事業のために寄附出捐した資金で遺言執行人が選択決定した事業である。すなわち遺言執行人代表伯爵樺山愛輔は、故子爵の遺志にしたがってこの資金で行うべき事業の選択を伯爵牧野伸顕に一任した。牧野伯爵は帝国美術院長福原鐐二郎及び東京美術学校長正木直彦とはかって諸方面の意見を徴し、またわが国美術研究の必要に照らして次の事業を行うこととした。

⑴　美術に関する基礎的調査研究機関として美術研究所を設けること。
⑵　黒田子爵の作品を陳列して同子爵の功績を記念すること。
⑶　前二項の目的を達するために適当な建物を造営すること。
⑷　事業成立の上は一切これを政府に寄附すること。

2．年代別重要事項

期　日	事　項
昭和元年12月25日	前記の事業を遂行するため委員会が組織され、東京美術学校長正木直彦が委員長に就任し、美術研究所事業については東京美術学校教授矢代幸雄、黒田子爵作品陳列については東京美術学校教授久米桂一郎・同岡田三郎助・同和田英作・同藤島武二及び大給近清、建物造営については東京美術学校教授岡田信一郎、会計事務については遺言執行人打田伝吉を各委員として事務を分掌進行させた。
昭和2年2月1日	美術研究所準備事業を開始した。
10月28日	東京市上野公園内に鉄筋コンクリート造、半地階2階建、延面積1,192㎡の建物1棟を起工した（本館）。
昭和3年9月	前記の建物が竣工したので、黒田記念館と名付け、美術研究所開設のため必要な備品・図書・写真等の研究資料を設備し、また館内に黒田子爵記念室を設け、黒田清輝の作品を陳列した。
昭和3年5月29日	遺言執行人代表者樺山愛輔は、建物・設備・研究資料等一切の外に金15万円をそえて帝国美術院長に寄附を願い出た。
昭和5年6月28日	勅令第125号により帝国美術院に附属美術研究所が置かれ、東京美術学校長正木直彦が同研究所の主事に補せられた。
10月17日	美術研究所開所式を挙行した。